

縄文時代後期

成田滋彦

青森県埋蔵文化財調査センターの設立以前の調査は、昭和49・50年に108個という大量の土偶を出土した青森市近野遺跡、下北半島で初の後期後葉の集落調査を実施した大畠町水木沢遺跡、後期中葉の十腰内Ⅲ式で検出例が少ない住居跡を検出した金木町神明町遺跡があげられる。^(注1)^(注2)^(注3)

このように貴重な遺構の検出及び遺物が発見されたが、多くは道路建設に伴う調査であり、そのために集落全体の構成が不明であったが、センターが設立された昭和55年以降に至って、集落全体を調査する事例が多くみられるようになってきた。

竪穴住居跡

昭和55年以降には、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴い発掘調査が行われた。

昭和55年には南郷村馬場瀬^(注4)遺跡で、十腰内Ⅳ・V式の住居跡5軒を検出した。また、特殊竪穴遺構3基を検出し住居跡の可能性も考えられる。

昭和58年には、八戸市葦窪遺跡で中期末葉(大木10式併行期)～後期中葉(十腰内Ⅲ式)の35軒を検出した。第77B号住居跡から、ほぼ完全な形での深鉢形の狩獵文土器が出土している。^(注5)八戸市牛ヶ沢遺跡では、後期初頭期の住居跡4軒を検出した。^(注6)

昭和59年では、今津バイパスの建設に伴い調査した平館村尻高^(注7)遺跡で、地床炉をもつ十腰内V式の住居跡を5軒検出した。住居跡は出入り口施設をもつ住居の構造である。出入り口施設をもつ住居跡は後期の段階で増加する傾向がみられる。

同遺跡では北海道系の堂林式を伴う住居跡が2軒と、深鉢形土器の体部にバンドを巡らす余市式の土器が出土した。これらの北海道系の遺物は、本県では主体的ではなく、陸奥湾沿いの海岸部分に多く遺跡が存在し、北の交流・影響を考えるうえでは重要な資料と考えられる。なお、堂林式は今別町ニツ石^(注8)遺跡でも出土している。

また、同年には六ヶ所村の大石平遺跡の調査が開始された。六ヶ所村内の発掘調査の多くは、昭和



六ヶ所村上尾駒(2)遺跡

49年から、むつ小川原開発に伴うものであり、数多くの遺跡の調査があこなわれた。その全体の発掘調査面積は、50万m²という面積に至っている。

その中で、大石平遺跡は、昭和58年～60年の三カ年の調査で、90,000m²のほぼ全面を調査し、調査の結果、住居跡・土坑群・捨て場・配石遺構等を配置した十腰内I式の集落である。^(注9)

一方、同一丘陵で大石平遺跡の南方800mに位置する上尾駒⁽²⁾遺跡も土坑墓を中心とした十腰内I式の環状集落である。^(注10)

この2つの集落は、いずれも十腰内I式期の時期であり、集落が同時に存在していたのか、あるいは別々に存在していたのか興味ある問題である。

筆者は、両遺跡から出土した切断土器を比較検討し、壺形土器の形態に差がみられ、土器の形態差から別々の集落の可能性があると指摘した。これは遺物の一要素の比較であり、今後は遺構全体の比較検討が必要であると思われる。

平成3年には、八戸平原開拓建設事業に伴う発掘調査が行われた階上町野場⁽⁵⁾遺跡で、後期初頭期の配石遺構と住居跡4軒を検出した。第110号住居跡の覆土からは大形の土偶が出土している。^(注11)

平成8年には、県道尾駒・有戸線改良事業に伴い、六ヶ所村幸畠⁽¹⁾遺跡を調査し、十腰内I式の住居跡3軒を検出した。^(注12)

墓

後期初頭期の牛ケ沢式から、後期中葉の十腰内I式にかけての段階は、特異な葬制がみられる。人骨を土器内に埋葬する甕棺葬であり、これは大正6年に笠井新也氏が、浪岡町天狗平遺跡を調査し、昭和8年に喜田貞吉氏が青森市山野峠遺跡で発掘調査を行い注目されてきたものである。甕棺葬に関しては、葛西 効氏が県内の甕棺をまとめ、現在36遺跡の出土を確認している。^(注13)^(注14)^(注15)

なお、昭和46年に成人女性骨が埋納された土器が六ヶ所村弥栄平⁽¹⁾遺跡から農作業中に出土し、その際に復顔が試みられ、縄文美人として青森県立郷土館に展示されている。^(注16)^(注17)



青森市山野峠遺跡 石棺墓（青森県立郷土館）



倉石村薬師前遺跡 甕棺墓

なお、弥栄平(1)遺跡は昭和59年に発掘調査^(注18)が行われ、中期中葉～後期前葉期の集落が検出されている。

昭和55年には、六ヶ所村鷹架遺跡から十腰内I式の土坑内に3個の壺形土器が出土し、その土器の内部から人骨が出土しており、合葬墓の可能性も考えられる。^(注19)

昭和58年には、黒石市一ノ渡遺跡から配石・組石を伴う土坑墓を検出している。^(注20)

また、平石を四角に組んだ石棺墓は津軽地方に多く分布しているが、昭和61年に六ヶ所村弥栄平(4)^(注21)遺跡からも1基検出している。

なお、青森市小牧野遺跡に代表される環状列石墓も、後期前葉期から中葉にかけての特徴であり、地域的及び時期的に限定された遺構と考えられる。^(注22)

このように配石を伴う土坑墓は、列石状に組むタイプ・環状列石のタイプ・不規則なタイプと墓域内の構成は一様でなく、複雑な様相を呈している。

昭和60年には、沖附(2)^(注23)遺跡の第2号ピット(フラスコ状ピット)から、切断土器・深鉢形土器が出土し、転用墓の可能性が考えられる。

後期中葉期(十腰内II・III式)の段階は、検出例が少なく不明な点が多い。また、後期後葉(十腰内IV・V式)の段階は、八戸市の風張遺跡^(注24)に代表されるように埋葬の主体は、土坑墓が占めると考えられる。

センター20年の発掘調査は、開発に伴うものが多く、集落全体の調査が行われた遺跡には、六ヶ所村大石平遺跡・上尾駒(2)^(注25)遺跡・沖附(2)^(注26)遺跡、八戸市田面木平遺跡・丹後谷地遺跡・風張遺跡がある。しかし、集落全体を概観し、集落内における墓の変遷研究が遅れている。

今後、遺跡内で検出した住居跡・墓を個々に分析するとともに、他の遺構も含めた集落全体の中で位置付けることが必要である。



八戸市喜庭遺跡 狩猟文土器



青森市近野遺跡の土偶

遺物

土器の特徴は、後期前葉期は基本となる深鉢形の他に、鉢・浅鉢・台付鉢・皿などの器種の分化がみられる。(上尾駿^(注25)遺跡・大石平遺跡) また、日常容器としての粗製土器と赤塗を塗布した精製土器が製作される。

このことは、器形の分化は調理の変化に伴う器の変化と考えられ、煮炊き中心であった食生活の変化が考えられる。

なお、精製土器は配石を用いた遺構(一ノ渡遺跡)^(注27)つまり非生産的な遺構や、非日常的な切断土器の製作など、祭祀を中心とした縄文社会の内部の変容に伴って、出現したと考えられる。

土器型式は、磯崎正彦氏が十腰内Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式と設定して以来、磯崎氏が示唆した十腰内Ⅰ式の細分と、中期末葉～十腰内Ⅰ式に研究主体がおかれて、研究者による多くの土器編年が提示され活発に討議されてきた。六ヶ所村の弥栄平^(注30)遺跡・沖附^(注31)遺跡・八戸市牛ヶ沢遺跡の発掘調査によって出土した土器が、土器編年の研究に寄与したと考えられる。

土器以外の祭祀遺物は、後期中葉の十腰内Ⅰ式(大石平遺跡)^(注32)と、後葉の十腰内Ⅳ・Ⅴ式(風張遺跡)^(注33)に多く製作される。遺物の中において鐸形土製品やスタンプ形土製品など用途の不明なものがあるが、多くは祭祀に用いられた遺物と考えられる。

この二時期の段階に多量に製作されるのは、中葉期が十腰内式文化の成熟期であり、後葉期十腰内Ⅴ式が亀ヶ岡文化の萌芽期であり、地域文化圏の拡大が、多くの祭祀遺物を生み出す背景にあったのではないかとも考えられる。

センター20年の調査は、調査担当者が大量に出土する遺物を処理するのに終始した嫌いがあった。しかし、大量の出土遺物は後期初頭期～十腰内Ⅰ式の編年研究を活発化させたが、これ以降の編年研究は活発に行われなかった。今後は後期全体の物差しというべき土器編年を、磯崎編年の再検討も含め検討すべき時期と考えられる。

(青森県埋蔵文化財調査センター総括主幹)



六ヶ所村大石平遺跡 出土手形・足形土版